

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

寺ノ前遺跡・畷遺跡

2003年3月

島根県匹見町教育委員会

—益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書—

寺ノ前遺跡・畠遺跡

2003年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託をうけて、匹見町教育委員会が平成13年度に行った
益美地区・山間地域総合整備事業に伴う、寺ノ前遺跡・城遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会
調査主任	匹見町教育委員会文化財保護専門員 渡辺 友千代
調査補助員	匹見町教育委員会主任事務 山本 浩之
	匹見町埋蔵文化財調査室 栗田 美文
調査協力	匹見町埋蔵文化財調査室（臨雇） 大賀 幸恵
	大谷 真弓
	渡辺 晴
調査指導	島根県教育委員会文化財課ほか
事務局	匹見町教育委員会教育長 松本 隆敏
	匹見町教育委員会次長 大谷 良樹
発掘作業員	森脇 雅夫 栗川 修 村上 強 中間昭二郎
	斎藤 幸大 藤井 一美 中尾 春男 大館 高義
	長谷川時子 益田 愛子

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの堀野技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大なご協力をいただいた。また、山口大学人文学部の中村友博教授から一方ならないご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

なお、発掘現場においては土地所有者をはじめ、地元の方々に終始多大なご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構-P、土坑状遺構-SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した現地図面は、美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員らの協力を得て、執筆は渡辺・栗川がともに行い、編集は渡辺が行ったものである。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	(渡辺友千代)	1
第1節 調査の経緯.....	1
第2節 調査の経過.....	1
第2章 地区の地形・歴史的立地	(渡辺友千代)	2
第1節 地形的立地.....	2
第2節 歴史的立地.....	3
第3章 寺ノ前遺跡	(栗田 美文)	4
第1節 位置・立地.....	4
第2節 調査の概要.....	5
1. 調査区の設定.....	5
2. 層位と層序.....	5
第3節 遺構.....	7
1. はじめに.....	7
2. 遺構の様子.....	7
第4節 出土遺物.....	9
1. はじめに.....	9
2. 出土遺物	(渡辺友千代)	11
(1) 繪文土器類	11
(2) 瓦質土器・土錘・陶磁器類	11
(3) 石器類	13
3. まとめ	13
第4章 島遺跡	(栗田 美文)	14
第1節 位置・立地	14
第2節 調査概要	15
1. 調査区の設定	15
2. 堆積状況	15
第3節 遺構	17
1. 遺物包含層と遺構	17
2. 5・6層層界部の遺構検出状況	18
3. 3・4層層界部の遺構検出状況	19

第4節 出土遺物	(渡辺友千代)	20
1. はじめに	20	
2. 実測遺物	20	
(1) 弥生土器	20	
(2) 上部器・陶磁器類	21	

挿図・図表目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図	2
第3図 地形断面図	3
第4図 寺ノ前遺跡の調査区配置図	4
第5図 寺ノ前遺跡上層図	6
第6図 寺ノ前遺跡遺構図	8
第7図 寺ノ前遺跡実測図	10
第8図 寺ノ前遺跡実測図	11
第9図 寺ノ前遺跡実測図（石器）	12
第10図 噴遺跡の調査区配図	14
第11図 噴遺跡上層図	16
第12図 噴遺跡遺構図（1）	17
第13図 噴遺跡遺構図（2）	18
第14図 噴遺跡遺構図（3）	19
第15図 噴遺跡実測図	20
第1表 寺ノ前遺跡遺構計測表	7
第2表 寺ノ前遺跡出土遺物集計表	9
第3表 噴遺跡遺構計測表（1）	17
第4表 噴遺跡遺構計測表（2）	19
第5表 噴遺跡出土遺物集計表	20

図版目次

図版1 烏瞰する遺跡と周辺

図版2

1. 北からみた寺ノ前遺跡全景

3. 南からみた発掘風景

5. 南西からみたA調査区の東壁

2. 西からみた寺ノ前遺跡遠望

4. 北東からみたA調査区の南東壁

図版3

1. 北東からみたB調査区の西壁

2. 南西からみたB調査区の北西壁

3. 陶磁器の出土状況

4. 瓦器の出土状況

5. 繩文土器の出土状況

6. 打製石斧の出土状況

7. 南からみたA調査区の遺構表出状況

8. 南からみたSK01の表出状況

図版4

1. 北からみたSK04の表出状況

2. 北からみたSK05の表出状況

3. 北西からみたSK06の表出状況

4. 南東からみたSK07の表出状況

5. 南からみたSK01の半截状況

6. 南西からみたSK02の半截状況

7. 北西からみたSK04の半截状況

8. 南東からみたSK05の半截状況

図版5

1. 南東からみたSK06の半截状況

2. 南西からみたSK01・SK02の完掘状況

3. 西からみたSK03の完掘状況

4. 南からみたSK04・SK05の完掘状況

5. 南からみたSK06・SK07完掘状況

6. 南からみたA調査区の完掘状況

7. 南からみたB調査区の遺構完掘状況

8. 南西からみた調査区の全景

図版6

1. 磨製石斧の出土状況

2. スクレイパーの出土状況

3. 繩文土器類

4. 繩文土器・瓦器・土錐・陶磁器類

5. 石器類

図版7

1. 北からみた畠遺跡全景

2. 北西からみた畠遺跡の近景

3. 北東からみた発掘風景

4. 西からみたA調査区の南東壁(左辺)

5. 南西からみたA調査区の東壁

図版8

1. 南東からみたB調査区の西壁

2. 南西からみた南トレンチの東壁

3. 土師器の出土状況(A調査区のSK01)

4. 弱生土器の表出状況(5層)

5. 北西からみたA調査区の遺構表出状況(4層上位部)

6. 北からみたP01・SK01の表出状況(A調査区4層上位部)

7. 東からみたP04・P05表出状況（A調査区4層上位部）

8. 南からみたP07の表出状況（A調査区4層上位部）

図版9

1. 北西からみたSK01の半截状況（A調査区4層上位部）

2. 北からみたP01・P11の検出状況（B調査区4層上位部）

3. 南西からみた北東方向に順列する柱穴（A調査区4層上位部）

4. 南からみた遺構完掘状況（A調査区4層上位部）

5. 北からみたB調査区北半の遺構表出状況（6層上位部）

6. 南からみたB調査区南半の遺構表出状況（6層上位部）

7. 北からみたB調査区北半の遺構完掘状況（6層上位部）

8. 南からみたB調査区南半の遺構完掘状況（6層上位部）

図版10

1. 東からみた調査区全景

2. 弥生土器・上師器・瓦器・陶磁器

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本報告するものは平成14年の本年度としているが、現地調査は13年度に実施したものであった。これは「益美地区県沿中山間地域総合整備事業」に伴い、平成12年度の分布調査によって発生したもので、したがって平成13年度に本格調査を実施したものであるものの、当年度においての報告は時間的に無理ということから生じたものであった。

第2節 調査の経過

本書でとり上げている寺ノ前・畠（なわて）の2遺跡は、いずれも四見町大字澄川字七井原に所在するもので（第2図・第3図・図版1）、うち前者の現地調査は平成13年10月2日から同年11月28日にかけて実施したものである。また後者は平成13年12月7日から平成14年3月15日までという期間を費して行なったが、ただこの2遺跡とも傾斜地に立地していること、そして上

位部が水田と化されているために削平も激しく、攪乱を生じているなど、けして良好な遺跡であったといえるものではなかったのである。しかし寺ノ前遺跡においては1片であるものの、縄文中期中葉に位置づけられる谷日式のものがみられたり、これと併行するものかも知れないが、数点の波子式も出土しているなどの問題を投げかけた貴重な遺跡であることはいうまでもない。

なお、調査期間中の平成13年12月21には、対岸のアガリ遺跡に調査指導に来跡された辰馬考古資料館の矢野健一学芸員が、また平成14年2月16日には町内詳細分布調査の指導に来跡された島根大学法文学部の山田康弘助教授らに助言をいただいたのであった。

（渡辺友千代）



第1図 遺跡位置図

第2章 地区の地形・歴史的立地

第1節 地形的立地

本地区は美濃郡匹見町大字澄川と称されている地区で、匹見町域の北西に位置し、北西流する匹見川の下流域に当たっている（第1図）。

その本地区を貫流する匹見川は、北東—南西方向に縱走する断層谷に支配されながら流下するが、最終的にはこれを幾重にも突き破りながら北西流している。しかも急斜地という匹見地域特有の地形は、渓谷を発達されるものの谷平地を形成することはほとんどなく、支流との合流地に僅かな河岸段丘地を見るにすぎないのである。

また標高は低位地で約120m、山地の高位地で約700mを測るが、もっぱらの人文活動域は狭長な流域沿いの120m～200mの標高台で営まれている。そして流域沿いにはツバキ・カシ・タブノキといった常緑・照葉樹林もみられるが、山地のほとんどはコナラ・ミズナラといったナラ林を中心とする落葉広葉樹林で占められていて、そこにはタヌキ・キツネ・サル・ツキノワグマなどの中動物が生息している。一方、匹見川にはアユ・ウナギ・ウダイ・ケガニなども生息し、昭和30年代まではマスも遡上していたというが、近年ではゴギといった冷水魚も余り姿をみることができなくなってきたという環境下にある。



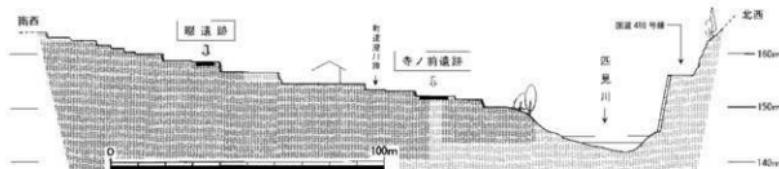
凡　例

- | | | | | |
|---------|---------|----------|--------|----------|
| ① 寺ノ前遺跡 | ② 畏遺跡 | ③ 土井原土井跡 | ④ 叶松城跡 | ⑤ 金山城跡 |
| ⑥ アガリ遺跡 | ⑦ 嵐城跡 | ⑧ 田尻ノ原遺跡 | ⑨ 丸潤鉢跡 | ⑩ 金山温泉山跡 |
| ⑪ 芝遺跡 | ⑫ 舟戸遺跡 | ⑬ 小田原遺跡 | ⑭ 長蓮寺跡 | ⑮ 山根ノ下遺跡 |
| ⑯ 小弘遺跡 | ⑰ 火ノ口鉢跡 | | | |

第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

第2節 歴史的立地

本地区は、近世期から明治22年までは澄川村と称され、そして匹見上村と道川村との合併するまでの昭和30年までは匹見下村といわれていて、村役場が置かれるなど該地は中心的な役割を果たしてきたのであった。ただ、ほとんどは山野で占められるという地形的立地から、農林業を中心とした零細な兼業農家が多く、けして豊かな村とはいえるものではなかったのである。



第3図 地形断面図

近世期の中ごろには益田代官所の出張所が設けられるなどの一方、丸瀬鉄跡・火ノ口鉄跡に見られるように鉄業も行なわれていた。また銅採掘も行なわれていたらしく金山溢銅山跡があり、とくに本村に隣接する谷口村は銅生産地として大森銀山領でもあったのである。そして中世遺跡としては、本報告する地区に当たる上井原に寺戸氏が據ったと伝えられている叶松城跡、その城館であったと想定される上居跡がみられる。また長尾原には叶松城の枝城であったと考えられる嶽城跡、中世中ごろの支配者階級の住居跡と想定される山根ノト遺跡が持三郎に存在しているのである（第2図）。

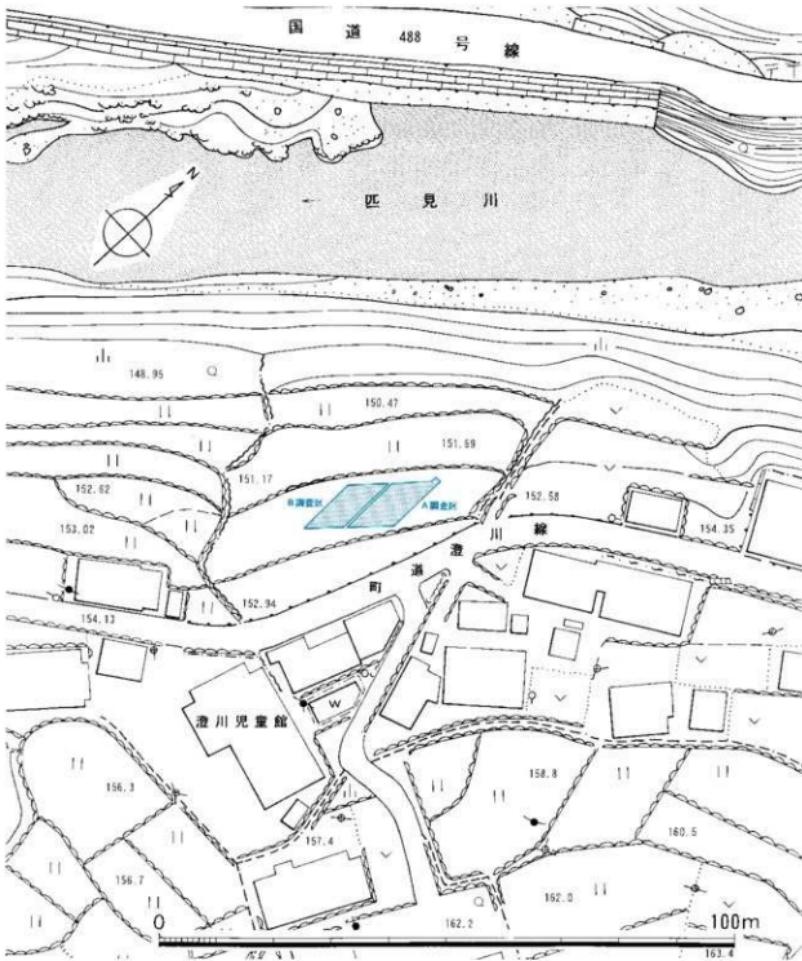
また原始・古代遺跡としては、縄文早期末の織維土器、そして縄文前期初頭の羽鳥下層式、縄文中期後葉の春日式土器などが検出されている上井原のアガリ遺跡があり、持三郎では鎧崎式類が出土した芝遺跡もある。そして同じく持三郎には縄文後晩期の舟戸遺跡・小弘遺跡などが分布し、原始・古代遺跡はけして貧弱ではなかったことがわかる（第2図）。

（渡辺友千代）

第3章 寺ノ前遺跡

第1節 位置・立地

本遺跡は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ998番地ほかに所在し、そこは小字名を寺ノ前と呼ばれる場所である（第2図）。



第4図 寺ノ前遺跡の調査区配置図

該当地は、滑川地区の南西側にあって、匹見川が形成した左岸に存在する。この匹見川が形成した河岸段丘は、大きく3段からなっており、本地点は下段部に形成された現地の標高153.08~152.42mを測る水田に立地している。こうした河岸段丘に立地する本遺跡周辺は、北東側が緩斜地となっていて民家や水田が点在し、一方北西側の狭い対岸には匹見川に沿って国道488号線が北東~南東方向に貫道しているといった景観にある（第3図・図版1・2-1・2-2）。

第2節 調査の概要

1. 調査区の設定

平成12年に行った分布調査では、段丘の低位に当たる河岸寄りに形成された北東~南西方向に細長い2つの水田に、 $2 \times 2\text{ m}$ の方形区を各1箇所設けて調査を行った。その結果、両区から多少の繩文上器・須恵器片などの遺物を確認することができた。このうち遺物は、河寄りのA区側に偏在して出土するという傾向が認められたので、その地点域を中心に調査区を設けることにした。

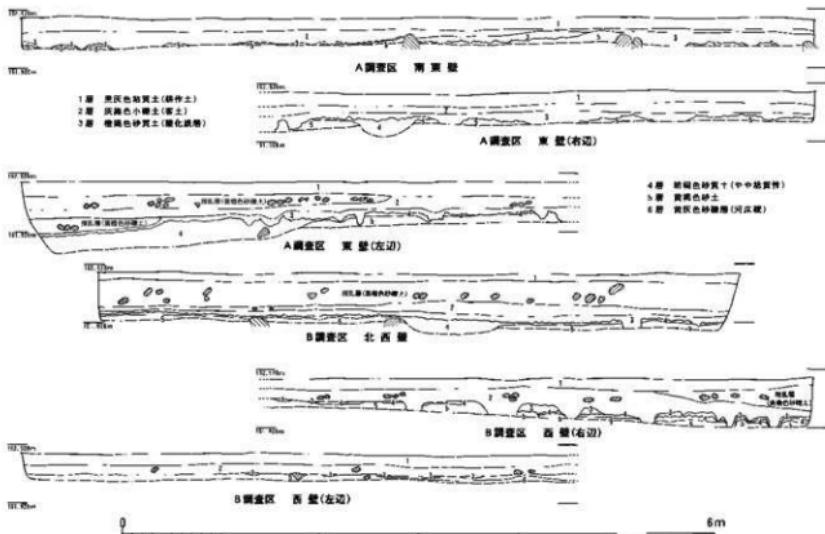
調査区の設定にあたっては、基本となる基準杭を定めることから始めることにした。その基点は、前述した調査区から上流の北東側約12m地点の河寄りに任意に定めた。そしてその基点をもとに、南側方向に11m測って南杭を定め、西側に向かって幅1mの南北トレンチと称するものを設けたのであった。調査は、このトレンチから層序または遺物の分布状況などを把握するために、まず掘削を開始することにしたのである。

南北トレンチを掘削する段階で、3層から数点の土器片を確認することができた。それらは西廻側に出土するという傾向がみられたので、そこでトレンチの西~南西面を拡張して調査区を設けることにした。まず西側に向かっては、北東面を斜行する石垣築地を考慮しながら、基準杭を起点に磁北から135°南西方向に振って、15m測った地点に杭を設け、また南西面も南杭を起点に同様な計測で杭を設け、そしてその両杭を結ぶという変則的な造り方をして設定したのである。したがって、区形は菱形状を呈し、調査総面積は約115m²だった。こうした調査区内には、層序の観察のための幅約40cm程度のセクションベルトを南北方向に設けて2分割とした。これら2区画したものは、アルファベットの大文字を用いて、北東側の上流からA・B調査区と呼称することにしたのである（第4図・図版2-3・5-8）。

2. 層位と層序

本遺跡における基本的層序は、上位から1層の黒灰色粘質土（耕作土）、2層の灰褐色小礫土（客土）、3層の橙褐色砂質土（酸化鉄の含浸）、4層の暗褐色砂質土、5層の黄褐色砂土、6層の黄灰色砂礫土の順で堆積していたのである（第5図）。

両調査区とも上述のように堆積していたが、両区の北・南半では差異がみられたのである。とくに標高が高かったと想像される南半では、4層黒褐色砂質土・5層黄褐色砂土の尖滅・あるいは欠除するといった状況からみて、水田造成などによって上位部に深度の高い削平が成されたものと推察される（図版2-4・3-2）。一方、北半では北東方向に次第に低位となっていくに連れて、その4層も僅かに厚くなっていることから、基本的な堆積層ではなかったかと思定される（図版2-5・3-1）。ただし北半の1・2層の間には、搬入されたのではないかと思われる不合理な砂礫土（擾乱層）



第5図 寺ノ前遺跡土層図

が堆積しており、以前に水田の再造成されたものと捉られる部分もみられるのであった(図版3-2)。このような状況を踏まえたうえで、堆積状態などを上へ下位層へと具体的にみていくことにする。

水田耕作土である1層は、粘質性の黒灰色土である。層厚は約12cmを測り、全体的にはほぼ水平に堆積している。つぎの2層は、灰褐色をした3~5cmの大いな小礫を含んだ床土としての客土である。その層厚は10~20cmを測って、高位の南半側は薄層となり、その逆に低位となっている北半側は厚かったのである。これらの1・2層からには削平などによって、混入したと想定される数百点余りの縄文・中世・近世期の遺物が多出した(第2表・図版3-3・4)。

3層は、酸化鉄分が下位層に含浸した橙褐色土で、厚い部分で15cmを測り、また尖滅、あるいは途絶した部分もあって、酸化鉄の含浸差がみられた。そしてその下位の4層は、有機質系でやや粘質性のある暗褐色砂質土である。北半側の深層部では約6cmを測るが、南側へと向かっては希薄となり、欠除している。これは前述したように、とくに南半側において、深度に至る削平が行われたものであろうかと考えられる。本層は人の行為以前においては、原地形に沿ってある程度の堆積を形成していたと想像される。

なお遺物・遺構は、B調査区を中心に百数点の縄文中期~晚期の土器片と十数点の石器類が出土しており、下位部にはこれらに共伴すると想定される遺構も検出されている(第6図・第2表・図版3-5~8・6-1・6-2)。

部分的に酸化鉄分の含浸がみられた5層は、黄褐色土である。層厚はほぼ中央部の尖滅部分から、北半の厚層部で約10cmを測り、とくに南半では部分的に尖滅する。その層中には、15cm大の円礫を多少含んでいるおり、大半は強く縮まった砂土層であった。これは生活基盤以前のもので、おそらく

西見川の溢流によって堆積した層位と想定される。本層における遺物の出土は皆無であったものの、4層下位部からの陥入坑（遺構）が認められた。

河床疊と想定される6層は、黄灰色をした砂疊土である。しかし砂疊土といっても、南半に露出した上位部をみるとかぎり、20cm前後の円疊を多く含んでおり、実質的には河床疊層といえるものである。したがって、文化層を包含する層とは捉え難いと判断し以下の掘削を止めたのである。

第3節 遺構

1. はじめに

遺構は、4層暗褐色砂質土と5層の黄褐色砂土の層界でSKと略号する土坑状のもの7基が確認された（第6図・第1表）。これらを層序状況、また遺物の出土状況から判断して、縄文期の文化層と捉られる4層の黒褐色砂質土を中心に構築されていたと想定されるが、下位の5層に陥入して検出されているため、その坑底部などは把握できるものの、したがって、構築上位部がはっきりしないのが実状であった。またそれらの各遺構は、全てが北半に検出されおり、基盤層が上昇する南半には認められないことから、頻度の高い削平などによって、すでに消失しているものもあるかと考えられる。なお、遺構が表出した5層は、部分的に酸化鉄分が含浸した砂土という土質のため、坑壁は貧弱で表面も明確ではなく、やや掘削しすぎた部分もあった。

以下、このことを踏まえた上で、各遺構の状況を記述することにする。

2. 遺構の様子

A調査区の北半面では、土坑状のも

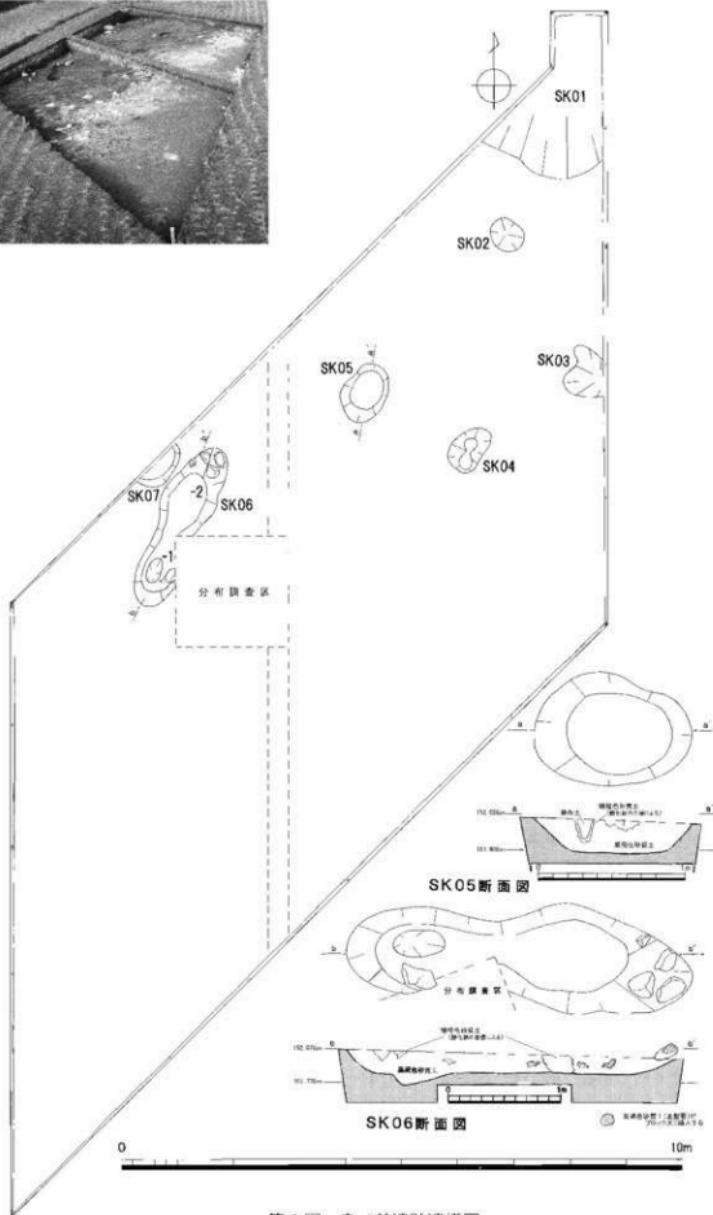
の5基が検出された（第6図・第1表・図版5-6）。これらは4層と5層の層界面上に検出されたもので、構築層は4層にあったものと想定できるものである。このうちのSK01は、北東

端の北西～東壁際にかけて半出して検出されたものである（図版4-5）。その短径・長径・深さについては大半が壁外に介入されていて測定できないが、認められる坑形から推測すると半径2m以上ある大型のもので、竪穴式住居の可能性も考えられた。ただし、その北東側は石垣築地で陥込んでいたため、拡張して精査していないので明らかでない。同坑内には、4層の暗褐色土が陥入し、11点の縄文土器片点を伴っていたが、しかし低位となって行く北東端面での検出であり、東・北西壁の層状からみると自然的な陥込みとも捉えられるようなものであった（図版5-2）。

その南～西南面に検出されたSK02～05は、最大径60～90cm前後、深さ12～23cm測り、楕円形・不整形を呈すものである（第1表・図版4-1・4-2・4-5～4-8・5-3・5-4）。これらの坑内には4層の暗褐色土が陥入しているものの、上位からの酸化鉄分の含浸の影響によって、遺構検出には困難を極めたのである。そのうちのSK03・04の土坑からは、縄文晩期の遺物が共伴していることから、該当期のものと想定できるものの、しかし断片的な遺構検出であって、具体的な形態については明らかにできなかったのである。

第1表 寺ノ前遺跡遺構計測表

計測	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表出面標高(m)	備考
SK01	—	—	27.0	151.840	縄文土器11点
SK02	51.0	62.0	13.0	152.020	
SK03	—	—	12.0	152.100	縄文土器2点
SK04	51.0	86.0	22.0	152.180	縄文土器24点・佐世物少量
SK05	70.0	99.0	23.0	152.030	
SK06-1	—	156.0	28.5	151.985	縄文土器13点・片貝1点
SK06-2	93.0	197.0	15.5	151.955	縄文土器2点・表化物少量
SK07	—	—	10.0	151.920	表化物少量



第6図 寺ノ前遺跡遺構図

B調査区では、SK06・SK07の土坑状なもの2基が4層と5層の層界で確認された(図版4-3・4-4・5-7)。そのうちのSK06は、北半側にある分布調査区の北西端に接して検出されたもので、試掘時に遺構を見逃していたため、その土坑の南東辺の一部分はすでに掘削されて消失しているという状況であった。そうした坑の形状は靴底状を呈し、最大長径約197cm、短径約93cm、深さ約29cm測って比較的深いものであった。坑壁は緩斜で、坑内には僅少な炭化物を含む暗褐色系のものが陥入し、部分的に5層の黄褐色砂質土がブロック状に嵌入している(図版5-1)。また坑中には、径15~30cmを測る自然石が5個確認され、それらの大半は河原石で、主に北東端部に集中してみられたのである(図版5-5)。このように介在する河原石は、他の土坑にはみられないことから、本坑に伴う意図的なものと想定されるが、どういった性格のものかについては判らなかった。なお本坑からは15点の縄文晩期を中心とする上器片・石器剥片の1点が検出された。そしてその北西側のSK07は、北西壁際に半出して検出されたため、その坑形は明らかでない(図版4-4)。これも4層から5層に亘る陥入状況から縄文期の遺構と考えられるが、共伴する遺物などは認められなく、判然としないものであったのである。

本遺構は、共伴する遺物の比率から捉えないと縄文時代晩期に伴うものと想定されるが、しかし深度の高い削平などが影響し、遺構の遺存は僅少で、また同一層内の検出というこもあって、個々の具体的な生活誌は浮かび上がってこなかったのが実状であった。

(栗田 美文)

第4節 出土遺物

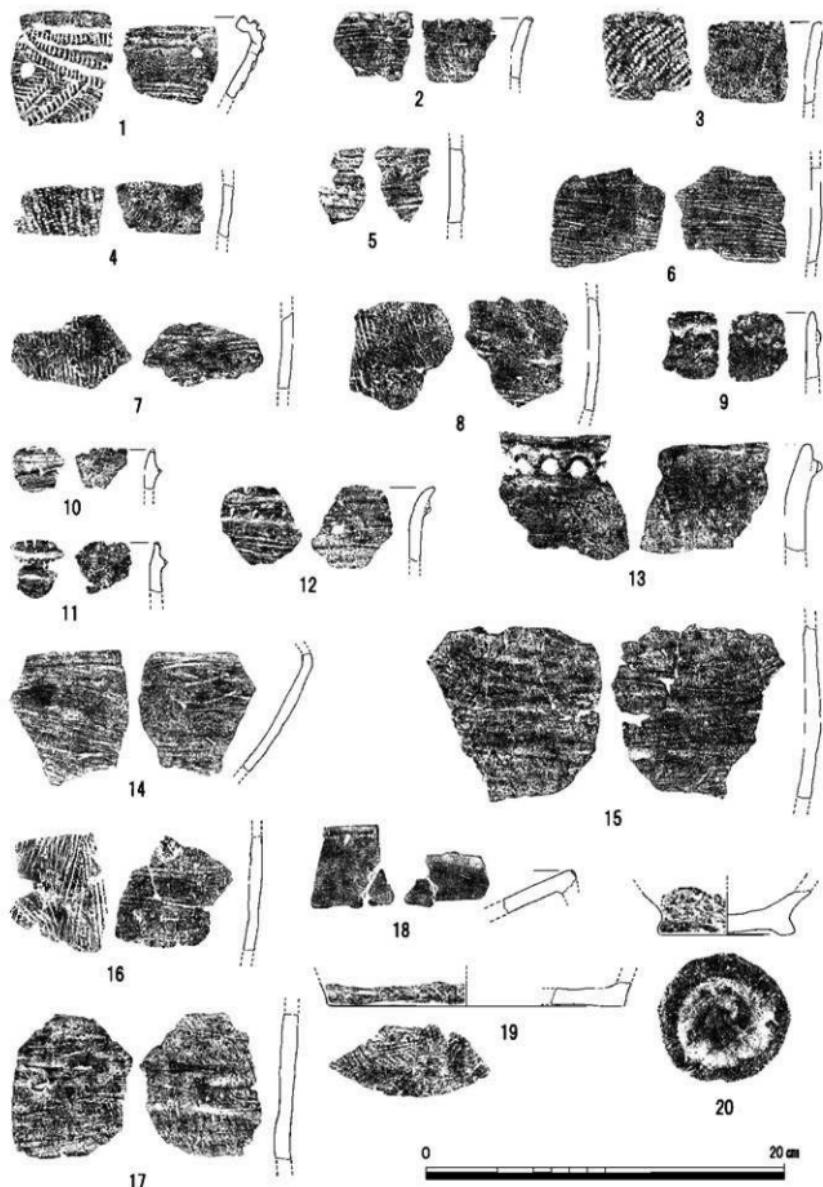
1.はじめに

本発掘調査では、原位置記録法に従い、遺物の採り上げを行なった。ただし、耕作上と客土である1~2層においては、調査区名と層位のみ記して採集するに留めた。このほか、発掘調査後の岡場整備事業の際、採集したものがある。それらを合計した総遺物点数は、673点におよび、その内訳は第2表(遺物集計表)のとおりである。

第2表 寺ノ前遺跡出土遺物集計表

	丹波丸井	御井	伊予	高知	三重	和歌山	奈良	滋賀	京都	兵庫	福岡	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	未定
南北トレンチ																	
1層	1																
2層																	
3層																	
4層																	
5層																	
6層																	
7層																	
A区																	
1層	4																
2層	1	25	1	3	1	1	2		78	4	18	12	29	1	2	1	22
3層		1	1	1					31								30
4層		2	1						42	1							30
5層																	6
6層																	14
7層																	14
B区																	
1層	4								21		8	1					31
2層	1	2	1						66		1	1					24
3層									52								24
共伴遺物																	4
ABペント																	4
瓦土		2															1
表面瓦		4							48		1						54
BT	3	1	22	2	4	1	1	2	45	3	1	41	27	1	76	2	1
	87																874

このうち、最も多く出土したのは、縄文土器類で420点(62.4%)にのぼり、これらのなかには縄文前期から晩期に至る各期の資料がみられる。また、厳密な所属時期を明らかにすることは困難であるが、縄文期の所産と考えられる石器・剥片類も総数91点(13.5%)を数え、その器種は多種に及ぶ



第7図 寺ノ前遺跡実測図

ものである。これらの縄文遺物のほか、中近世期の陶磁器類76点（11.2%）、土師器類41点（6%）、瓦質器26点（3.8%）がみられ、また須恵器片や、弥生土器片とおもわれる土器片も僅少ながら出土している。以下、形態的に特徴ある資料を図掲するとともに、みていくことにしたい。

2. 出土遺物（第7～9図・図版6）

（1）縄文土器類（第7図・図版6-3・4）

1～19・20は、縄文土器類である。このうち、本遺跡の性格づけをおこなう上で、特筆すべき資料は、1・3～5・9～13の資料である。

1はキャリバー型に開く口縁部片。横位の二枚貝を条痕地とする外面の、口縁上位に沈線文、その下位には低い隆帯を貼付し、その隆帶上はヘラ状工具による1字状の刻みを施している。内面はナデとするものの、二枚貝とおもわれる横位の条痕地がわずかに呑取される。その特徴的な製作手法には、春II式北牧段階の資料との類似性を見出せないでもないと考える。なお、本資料には補修孔が穿たれている。2は、端部に刻口を有する晩期の口縁部片である。

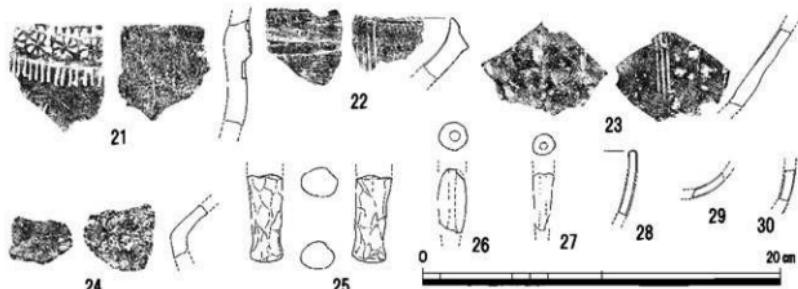
3・4は、外面にLRの縄文を施し、内面はナデとするもの。このうち3は、口縁部片で、端部にも施文がなされる。本類は、波子式にみられる肥厚帯こそ認められないものの、その縄文施文手法を共有しており、波子式に伴うものとみなしておきたい。5は、微隆帯を横位に貼り付けるもの。内面は、二枚貝条痕地を残すナデとする。轟B式の単純型器形を成すものに比定されよう。

9～13は、刻目突帯文土器である。このうち、10・11は、口縁端部と突带上にV字状の刻目が施される。このほかは、口縁端部を刻まないものである。9・13は、突带上に指による刻目が施されるもの。12は口縁が外反し、その下位の突带上にはV字状の刻目が施されている。

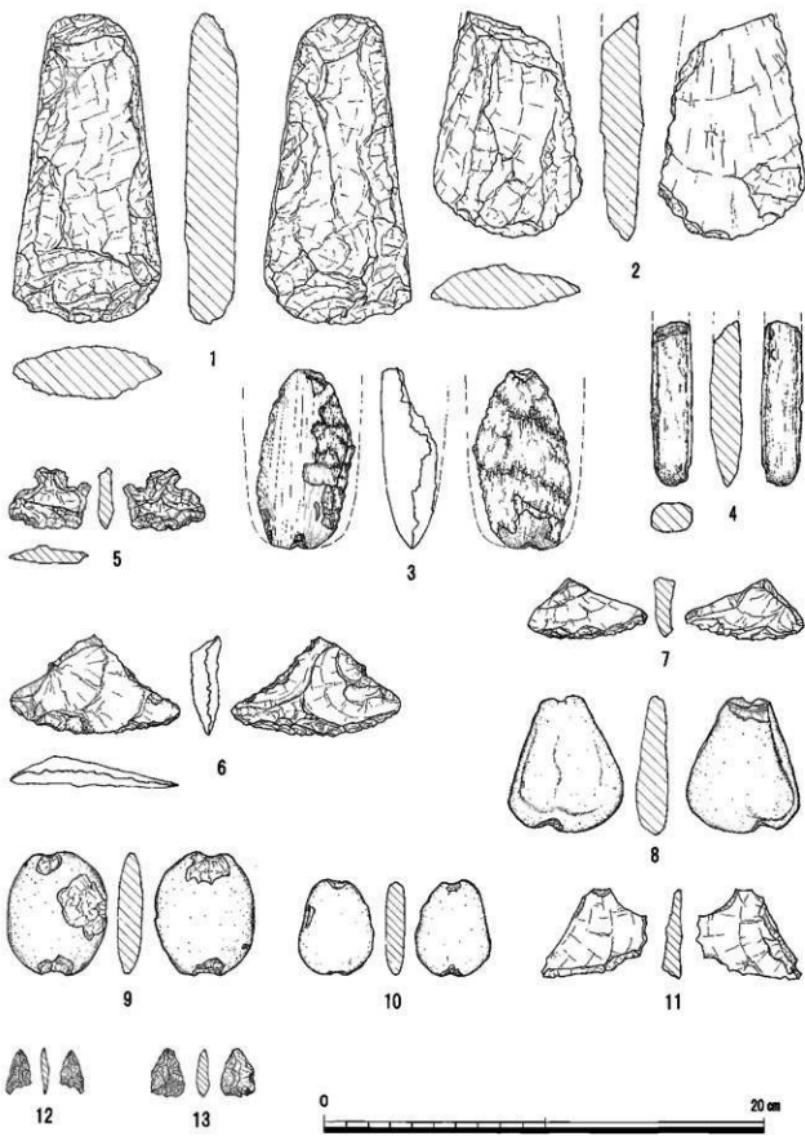
14は、晩期浅鉢の底部片。この他の深鉢体部片（6～8・15～17）は、板状の調整具を用いる点からみて、おそらく、晩期に位置付けられるものであろう。19・20は、深鉢底部片で、前者は平底、後者は凹底である。これらも晩期の所産とみなされるものである。

（2）瓦質土器・上鍤・陶磁器類（第8図・図版6-4）

18・21～30は、中世期の遺物と想定されるもの。このうち、18・21～25は瓦質土器。18は、底部片とおもわれる。図掲した資料の傾きは異なるが、時間的制約の為、正すことができなかった。御寛恕願いたい。21は、火鉢の口縁部片。口縁部外面に凸帯を貼り付け、花文と綫線文のスタンプを押捺さ



第8図 寺ノ前遺跡実測図



第9図 寺ノ前遺跡実測図（石器）

せる。22・23は攝鉢の口縁部片で、前者は4条、後者は3条の御目を有する。24は鍋の体部片。25は足鍋の脚部片である。26・27は土錘。いずれも、両端部を損傷する。28～30は、15世紀のものと想定される青磁碗片である。

(3) 石器類（第9図・図版6-5）

1・2は打製石斧、3は磨製石斧の刃部片、4は小型の磨製石斧である。5はその形態からみて、石匙未製品の可能性がある剥片。6・7は、横長剥片を素材とするスクレイパー。前者は2側縁に、後者は1側縁に刃部を有する。8～10は河川の小礫を素材とした打欠石錘である。それぞれ、16.7g、51.8g、37.8gを量る。11は横型の石匙、12は石鎌未製品である。

3. ま と め

本遺跡から出土した縄文土器類には、先述したように前期から晩期にわたる各期の資料がみられる。なかでも、中期の船元式・波子式・春日式・里木Ⅱ式に比定される資料が確認されたことは、今回の発掘調査の成果といえる。

このうち、分布調査において確認された資料も含めて、波子式ないし、それに伴うものと考えられる縄文施文土器類の内面調整に着目すると、細密な条痕を残すものや、二枚貝条痕地のものが確認される点、注意しておきたい。このような整形手法は、船元Ⅰ式の出土をみた中ノ坪遺跡にはみられないものであり、時期差を反映している可能性があろう。

そして、これらの縄文施文土器類との時期的な関係について明言することは控えたいが、春日式（北手牧段階）に類する資料が確認されたことは、本地域における文化の波及・搬入、さらには、船元式圏内における広域的な齊一性の解体を論じる上で、貴重な資料を提供したといえよう。

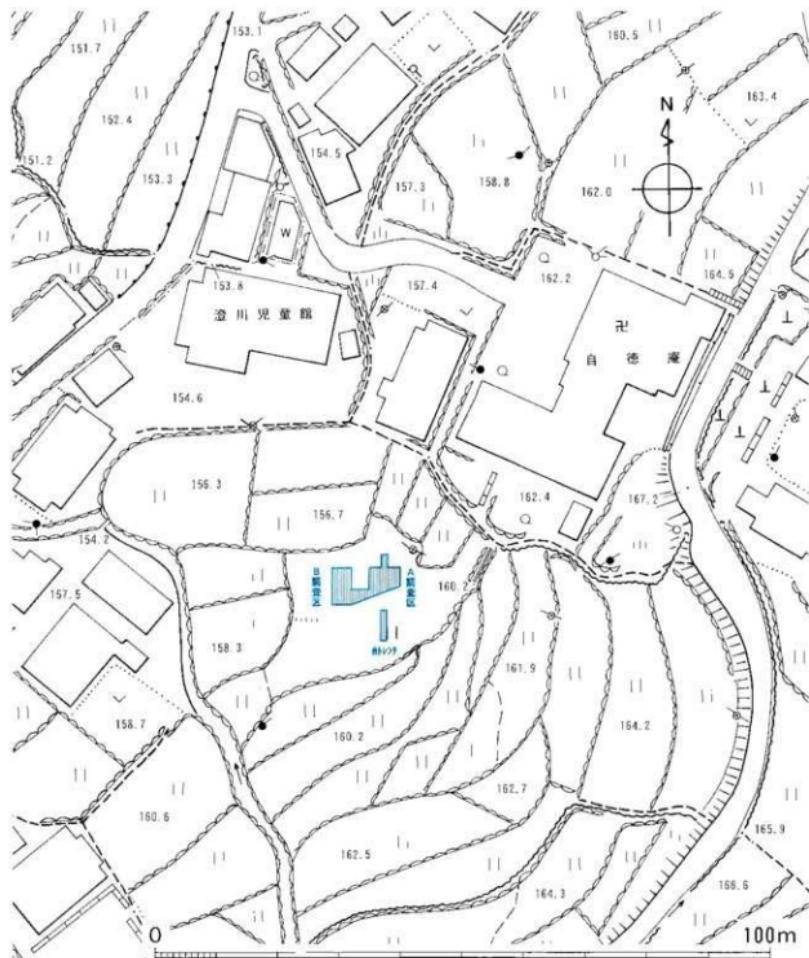
なお本節をまとめるにあたっては、別府大学院生の渡辺聰氏の見解を参考にした部分も多々あり、ここにお礼を申し上げる次第である。

（渡辺聰千代）

第4章 略 遺 跡

第1節 位置・立地

本遺跡は、小字名を畠（なわて）と称される島根県美濃郡四見町大字澄川イ1014番地に所在する。



第10図 略遺跡の調査区配置図

そこは上井原（どいのはら）と呼称される地にあって、そこを北西流する匹見川によって形成された狹長な河岸段丘の左岸に立地する（第2図・図版1）。

調査地点は、本地区の3段に形成された河岸段丘のうち、その中段部の現地標高約158～190mを測る水田と化した場所に設定したものである（第3図・第10図・図版7-1・7-2）。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

調査区は、平成12年度に行った詳細分布調査の結果に基づいて、本命地である水田を中心として設けることにした。まず基本となる基準坑を定めるため、調査対象地のほぼ中央部にある試掘区の南東杭から東方向へ3.5m測って、そこに基準杭を設けた。そして基点から磁北方向に5m測って北杭を定め、西側に向かって幅1mの北トレントと呼称するものを設け、また南側も基点から4m測った地点に同様な南トレントと称するものを設定し、掘削を試みた。その結果、北トレント南半の3層から陶磁器・土師器などの中世遺物が認められ、また下位の5層から弥生期のものが捉えられたため、そこで同トレント南半の東・西辺を各6mほど拡張した。したがって区形は磁北方向に凸状を呈するものとなり、それをA調査区と呼称することにして、掘削を再開したのであった。しかし掘削段階で試掘区の西～南面が気になり、その周辺に調査区を設けることにした。まず西面は、A調査区から西側へ3m測った地点に、前者と並列するように南北方向に長い3m×6mの方形区を任意に設定し、これをB調査区と称することとした。そして南面は、近接する石垣築地を考慮して、A・B調査区の南東端部を結び、そしてその北西側にある試掘区（南辺）との間に約50cmほどの余地をこして、両区を直線で結んだのであった。それはほぼ三角のV形をした約10.5m²で、A調査区の附属とした。その結果、調査の総面積は50.5m²となつたのであった（第10図・図版7-3・10-1）。

2. 堆積状況

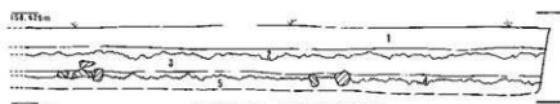
1層は、暗褐色を呈した粘質性のある耕作土である。層厚は10～20cmを測り、総体的に河寄り北西側に向かって厚く堆積していた。つぎの2層は、酸化鉄が含浸した赤橙色土。下位層の暗灰色土とは色調から分層しているが、土質的には下位層の3層として捉えられるものであった（第11図）。

10～20cmの大いの角礫を含む3層は、暗灰色土である。北西側の深層部では約70cmを測るが、南東側へ向かっては20cmを測って薄くなっていたのである。これらの堆積状況から、とくにA調査区南面において深度に至る削平が行われたものであろうと考えられる。したがって、本来は原地形に沿ってある程度の堆積高があったものと想像されるのである。なお本層からは陶磁器を中心とした約50点余りの中世期のものが出土しており、その下位部にはこれらに共伴すると想定される遺構がA調査区を中心に検出されている（第11図・図版7-4・5）。そして4層は、橙褐色粘質土で、酸化鉄分が下位層に含侵したものであった。

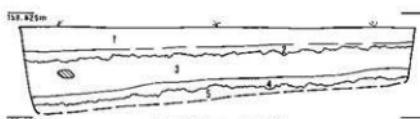
上位部に酸化鉄分の含浸みられる5層は、粘質性の強い黒褐色土である。層厚は約10cm測って、南東側の山寄りから北西側の匹見川下流に向かって下降する基盤層に沿って堆積していたのである。なお遺構・遺物は、弥生土器片が約40点余り出土し、B調査区の下位部には遺構も確認された（第11図・図版8-1・8-2）。そして6層は、黄褐色の粘土で、粘質性が強く締まっていた。層厚につ



A調査区 南東壁(左辺)

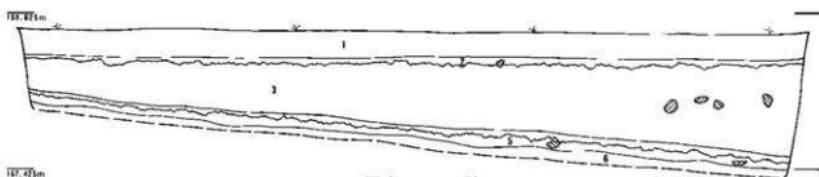


A調査区 南東壁(右辺)

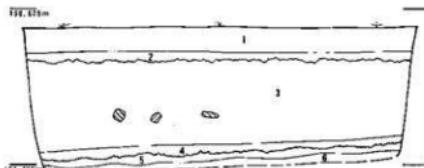


A調査区 東壁

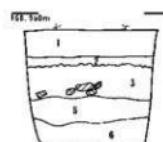
- 1層 暗褐色粘質土(耕作土)
- 2層 赤褐色土(鐵化鉄の含浸)
- 3層 暗灰色土(小礫を多く含む)
- 4層 橙褐色粘質土(鐵化鉄の含浸)
- 5層 黒褐色粘質土
- 6層 黃褐色粘土



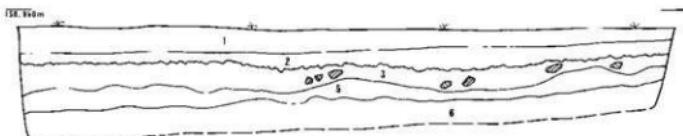
B調査区 西壁



B調査区 北壁



南トレンチ 北壁



南トレンチ 東壁



第11図 嘴遺跡土層図

いては下位を掘削していないので明らかでない。しかし分布調査において、下位層の状況はある程度推測できたので、以下の掘削を止めた。

第3節 遺構

1. 遺物包含層と遺構

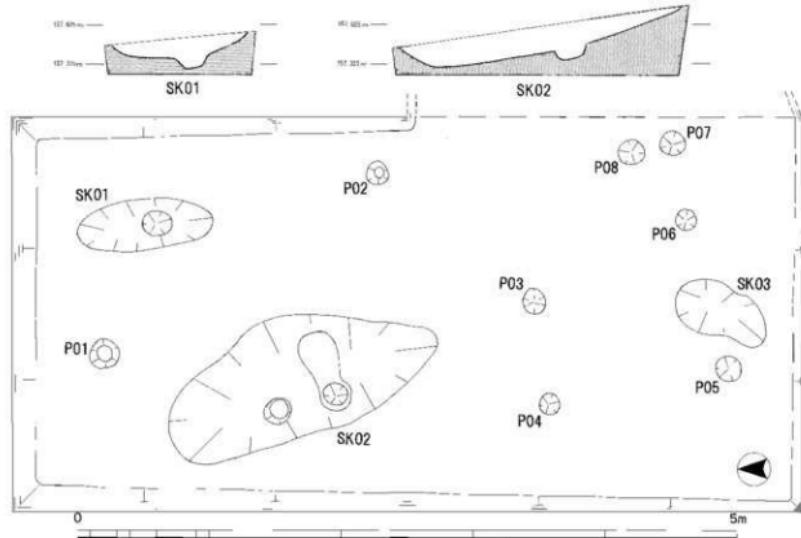
本遺跡の遺物包含層は、上位の人工的堆積層の近世期のものは除いて、2期のものが認められた。その1つは陶磁器・土器器などを包含する3層の中世期（第5表・図版8-3）のものと、そして5層を中心とした弥生期（第5表・図版8-4）のものであった。ま

たこれらに伴って、両期の遺構と思われるものが検出されたのであった（第12・13図）。

そのうちの検出された弥生期のものは、B調査区の5層の黒褐色粘質土と6層の黄褐色粘土上の層界で確認された（図版9-5・9-6）。それらの遺構の大半には、文化層として捉えた5層の黒褐色系の上質のものが嵌入していることから、構築面は5層中に存在したと考えられる。またA調査区を

第3表 磨遺跡遺構計測表（1）

計測	直径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表出面標高(m)	備考
P01	22.0	23.0	15.0	157.465	土器片
P02	19.0	21.0	12.0	157.885	
P03	19.0	20.0	6.0	157.805	
P04	17.0	19.0	6.0	157.775	
P05	19.0	20.0	7.0	157.915	
P06	16.0	17.0	8.0	157.925	
P07	19.0	19.0	8.5	157.930	
P08	19.0	20.0	8.5	157.910	
SK01	38.0	104.0	23.0	157.545	
SK02	91.0	214.0	49.0	157.550	炭化物多量・供土少量
SK03	39.0	75.0	13.0	157.915	



第12図 磨遺跡遺構図（1）

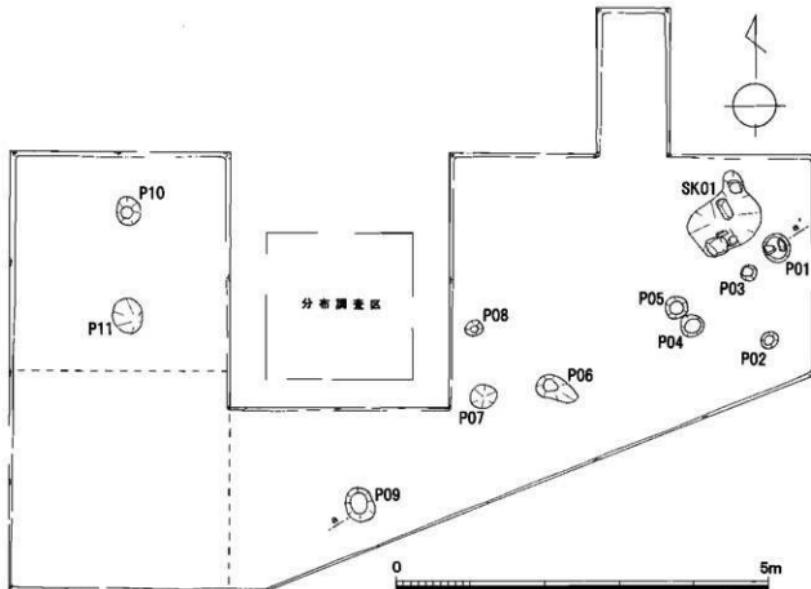
中心に確認された中世期のものは、3層の暗灰色土系上に酸化鉄（4層）が含浸した5層の上位部に検出されたものである。これらの遺構には、暗灰色土系の土質のものが陥入しており、遺物の出土傾向からも考えると、明確とはいえないが、その構築面は3層に存在していたと考えられるのであった（図版8-5～8-8）。

なお遺構については、その形状から柱穴状などをP、土坑のものをSKと略号することにしている。

2. 5・6層層界部の遺構検出状況

西側に設定したB調査区では、Pと略号した柱穴状なもの8穴が検出された（第12図・第3表）。これらのピットは径約20cm前後、深さ約6～12cmを測るもので、ほぼ円形を呈するものである。それらの表面は5層と6層の層界面に確認されており、遺構内には5層の黒褐色粘質土が陥入し、P01には1点の弥生期のものと想定される1点の土器片を作っていた。またこれらのピットは調査区の北半に偏在して散見されたが、しかし柱列などからみても統一性ではなく、機能的性格については捉えることができなかった（図版9-7・9-8）。なお、遺物と包含・共伴性からみて、弥生期と想定した時期に伴うものといえる。

同区内で認められたSKと略号する土坑は、3基のものが検出された。いずれもこれらはピットと同様、5層から6層に至る陥入状況から弥生期の遺構であろうと考えられる。このうち区の北西面に



第13図 噴遺跡遺構図(2)

確認されたSK02は、長楕円状を呈した土坑である。最大長径214cm、短径91cmを測って、深さ49cmで比較的深い。その坑内を覆う埋土は黒褐色系で、部分的に橙褐色の焼土が認められ、また炭化物も頗るであった。このような状況から、炉であった可能性も考えられるが、断定はできないものの、人為による火が扱われた場所だったことがいえる（図版9-7）。

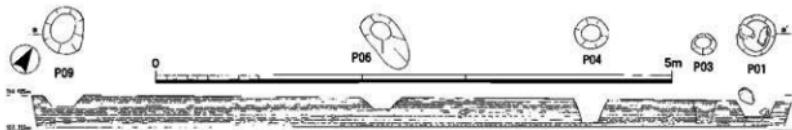
3. 3・4層層界部の遺構検出状況

A・B調査区の北半では、Pと略号した柱穴状のもの11穴、そして土坑のもの1基が検出された（第13図・第4表・図版9-1～9-4）。いずれも中世期の文化層として提えた3層の暗灰色系の土質が坑内に陥入していた。またそれらを遺物と包含・共伴性から考えると、該当期のものであったと想定されるものである。

このうち柱穴状のビットは、径22～59cmを測るもので、P06のように連穴するもの以外は単穴のものであった。それらの柱穴群は掘立式のものであって、中にはP01にみられるように柱を支えたと思われる補強石といえるものもみられる。これらは形態的にみて、該当期の掘立柱建物に伴う柱穴であったと想定されるが、狭小な発掘区であった上、遺構の遺存は僅少で、具体的な構造物は描くことができなかつたのである。ただしA調査区の南面を北東一南西方向にP01・P05・P06～P09の配列（第14図・図版9-3・9-4）をみると、ある程度の柱間隔・方向性を看取できたものの、しかし在穴する周辺を拡張していないということもあって、明確にいうことはできなかった。

第4表 噴遺跡遺構計測表（2）

計測 遺構	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表面標高(m)	備 考
P01	35.0	42.0	14.0	157.985	炭化物少量
P02	22.0	24.0	11.0	158.065	炭化物少量
P03	22.0	23.0	3.0	157.975	炭化物少量
P04	32.0	34.0	9.0	158.005	炭化物多量・焼土少量
P05	31.0	32.0	22.0	157.858	炭化物多量・焼土少量
P06	29.0	58.0	13.5	158.020	炭化物少量・焼土少量
P07	34.0	37.0	13.0	157.985	
P08	22.0	24.0	17.0	157.985	炭化物少量・焼土少量
P09	37.0	47.0	10.5	158.010	
P10		40.0	39.0	158.105	炭化物多量
P11	40.0	45.0	11.0	158.095	
SK01	73.0	120.0	29.0	157.985	土壤剖面1合・炭化物残渣3点・石灰・炭化物多量・揮付量の2例有



第14図 噴遺跡遺構図（3）

A調査区の西面で検出されたSK01は、長径約120cm、短径約73cm、深さ約29cm測って長方形を呈する。坑内には3層の暗灰色系のものが陥入し、僅かな焼土と多量の炭化物が認められ、土師器・陶磁器などの中世遺物を伴っていた。そして坑上には径15～30cmを測る河原石が5石確認され、それらは焼石で、中には煤が付着し割れているものもみられた（図版9-1）。一方、坑底部には径15cm大の石灰石が検出されたが、それが同坑とどのような意味合いをもつものかは判らなかったものの、総体的にみて本坑は、炉址としての機能をもったものではないかと思われるものであった。

（柴田 美文）

第4節 出土遺物

1. はじめに

傾斜地を水田に整地したという状況下においての発掘調査であったため、1・2層は勿論のこと、3層上位に至る層序においては削平、あるいは搬入上等で攪乱的であった。出土遺物の層位、あるいは種類等について

については第5表で掲示しているとおりであるが、凡そ3層は上師質・瓦質といった中世期の主体としたものであり、ほかに数点の青磁などの陶磁器もみられた。また4層は無焼層で、5層からは弥生上器が出土しているといった傾向がみられたのである。

これらのうち弥生上器、または十師質などの素焼製のものは、該当地が谷筋といった立地にあったということであろうが、細片で、しかも素地は溶解されているといった状況のものである。したがつて調整痕などが明確でないといったものが大半であるが、以下特徴づけられるといったものを抽出し、紹介していくことにする。

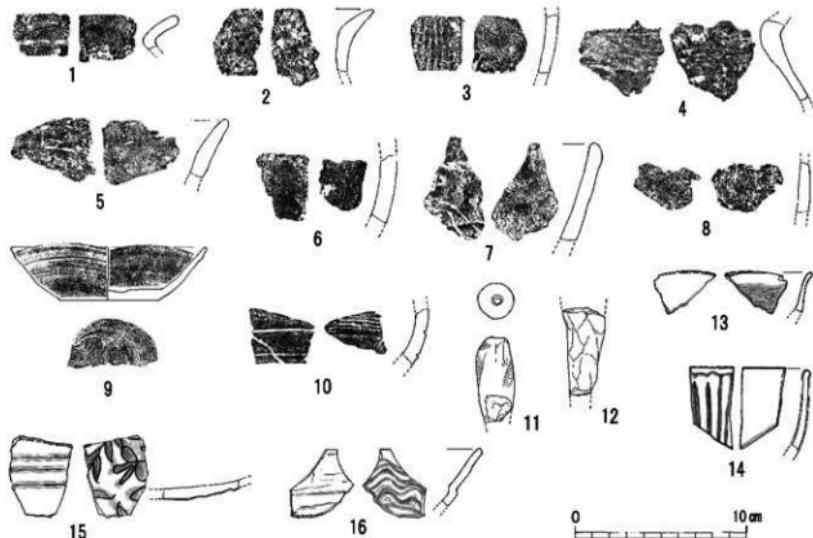
2. 実測遺物（第15図・図版10-2）

(1) 弥生土器

1～8は弥生土器で、このうち1・2は薄手の口縁部。前者は茶灰色を呈し、内外面とも器面は溶解し、胎上には2mm大の石英を含んでいる。頸洞部界に屈曲が看取され、広口壺であったのかも知れ

層名	弘法土器	筒形器	土師質器	瓦質器	骨器の量	土器	漆器	織物	竹
1-2層	60	0	0	1	-	-	-	-	5
A調査区	-	-	-	-	-	-	-	-	17
3層	10	-	-	-	-	-	-	-	15
4層	34	2	-	-	-	-	-	-	30
5層	26	3	-	-	-	-	-	-	30
内調査区	-	-	-	-	-	-	-	-	30
外調査区	-	-	-	-	-	-	-	-	30
北斜面	-	-	-	-	-	-	-	-	30
3層	11	1	-	-	-	-	-	-	30
4層	8	-	-	-	-	-	-	-	30
5層	2	-	-	-	-	-	-	-	30
南斜面	-	-	-	-	-	-	-	-	30
6層	1	-	-	-	-	-	-	-	30
3層瓦質器	2	-	-	-	-	-	-	-	30
上部瓦質器	1	-	-	-	-	-	-	-	30
計	47	112	21	2	1	1	1	3	少基

第5表 線遺跡出土遺物集計表



第15図 線遺跡実測図

ない。後者は甕の口縁部であろう。赤茶色を呈し、内外面ともナデ。3は胴部片で、外面はハケメ、内面はナデである。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は良好。4は口唇部欠く口縁部で、内外面ともナデのもの。成形時における砂粒の移動痕がのこり、器面は滑らかではない。5は鉢形の口縁部と思われるもので、内外面ともナデ調整で、胎土には金雲母を含み、淡赤褐色。6は、厚手の胴部片で、内外面ともナデで、3～5人の砂粒を多く含み、外面は明赤褐色、内面は淡朱色で、焼成は良好。

(2) 土師器・陶磁器類

9は上師器皿で、体部はハの字形にひらく。口径は約11cm、器高さ3cmを測り、底部は回転系りで、色調は灰白色を呈して精良である。10は、瓦器質製の火鉢片。外面には横方向の数条の沈線・内側にハケメを施し、色調は黒褐色。11は上鍤で、外面にはハケメ調整がみられ、比較的大型といえるもの。12は足鍋の脚片で、やや弧を描き、曲がっていることが看取されるもの。

13～16は、陶磁器片類。このうち13は茶碗の口縁部で、器面にハケメ調整がみられ、胎土は青灰色。釉は薄く、透明釉、内面口唇部は白釉が施されている。おそらく16世紀ごろの朝鮮製のものであろう。14は中国製の青磁で、外面には細めな連弁文様が施され、釉調は緑灰色。おそらく15世紀末から16世紀初めごろのものであろう。15は皿片で、外面には数条の稜がみられ、白色の釉層が厚い。内面には呉須による草花の染付けがみられ、胎土の色調は白灰色を呈する。16は、小鉢系のもので、内外面ともハケメがみられ、とくに内側は波状に描く。強い火を受けたものと思われ、白釉に艶がない。朝鮮製のもので、16世紀中ごろのものと考えられる。

(渡辺友千代)



鳥瞰する遺跡と周辺



1. 北からみた寺ノ前遺跡全景



2. 西からみた寺ノ前遺跡遠望



3. 南からみた発掘風景



4. 北東からみたA調査区の南東壁



5. 南西からみたA調査区の東壁



1. 北東からみたB調査区の西壁



2. 南西からみたB調査区の北西壁



3. 陶磁器の出土状況



4. 瓦器の出土状況



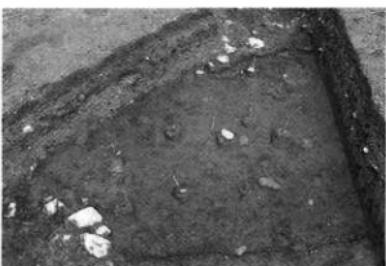
5. 繩文土器の出土状況



6. 打製石斧の出土状況



7. 南からみたA調査区の遺構表出状況

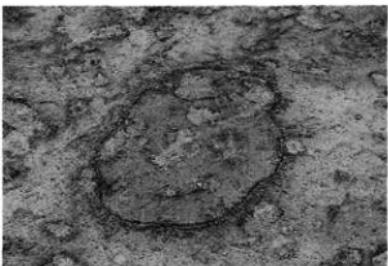


8. 南からみたSK 01の表出状況

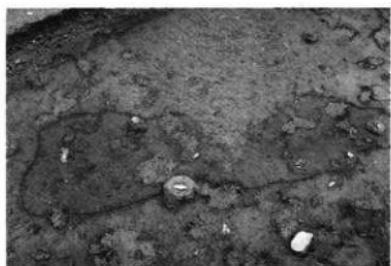
図版 4



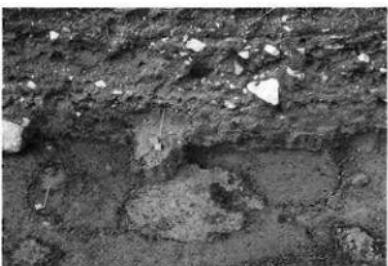
1. 北からみたSK 04の表出状況



2. 北からみたSK 05の表出状況



3. 北西からみたSK 06の表出状況



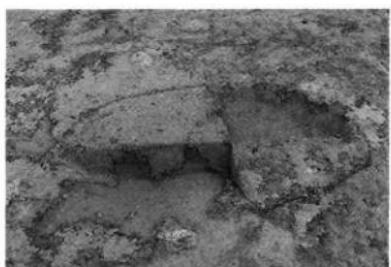
4. 南東からみたSK 07の表出状況



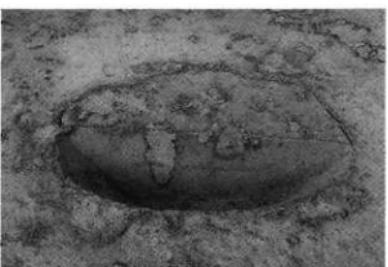
5. 南からみたSK 01の半截状況



6. 南西からみたSK 02の半截状況



7. 北西からみたSK 04の半截状況



8. 南東からみたSK 05の半截状況



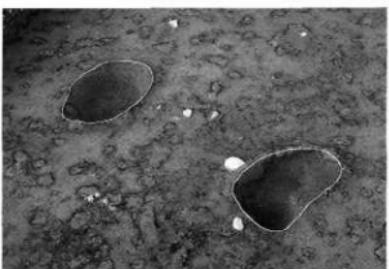
1. 南東からみたSK 06の半截状況



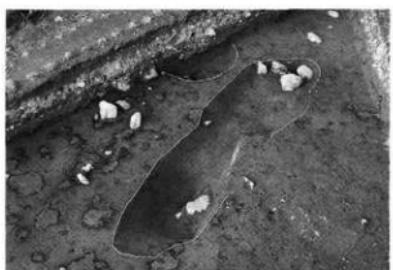
2. 南西からみたSK 01・02の完掘状況



3. 西からみたSK 03の完掘状況



4. 南からみたSK 04・05の完掘状況



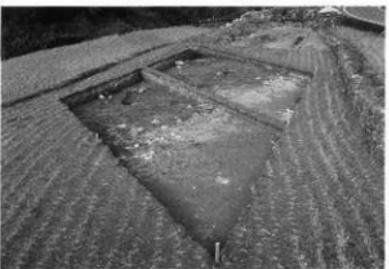
5. 南からみたSK 06・07完掘状況



6. 南からみたA調査区の完掘状況



7. 南からみたB調査区の造構完掘状況



8. 南西からみた調査区の全景

図版 6



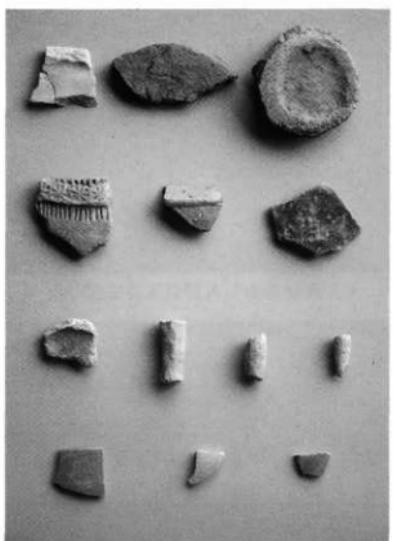
1. 磨製石斧の出土状況



2. スクレイバーの出土状況



3. 繩文土器類



4. 繩文土器・瓦器・土錘・陶磁器類



5. 石器類



1. 北からみた畠遺跡の全景



2. 北西からみた畠遺跡の近景



3. 北東からみた発掘風景



4. 西からみたA調査区の南東壁（左辺）



5. 南西からみたA調査区の東壁

図版 8



1. 南東からみたB調査区西壁



2. 南西からみた南トレンチの東壁



3. 土師器の出土状況（A調査区のSK01）



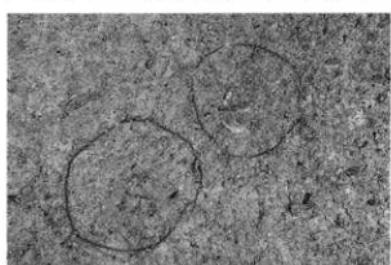
4. 弥生土器の出土状況（5層）



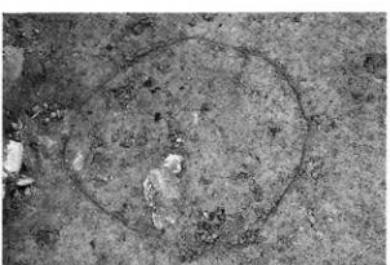
5. 北西からみたA調査区の遺構表出状況（4層上位部）



6. 北からみたP01・SK01の表出状況（A調査区4層上位部）



7. 東からみたP04・P05表出状況（A調査区4層上位部）



8. 南からみたP07の表出状況（A調査区4層上位部）



1. 北西からみたSK01の半截状況（A調査区4層上位部）



1. 北からみたP01・P11の検出状況（B調査区4層上位部）



3. 南西からみた北東方向に順列する柱穴（A調査区4層上位部）



4. 南からみた遺構完掘状況（A調査区4層上位部）



5. 北からみたB調査区北半の遺構表出状況（6層上位部）



6. 南からみたB調査区南半の遺構表出状況（6層上位部）



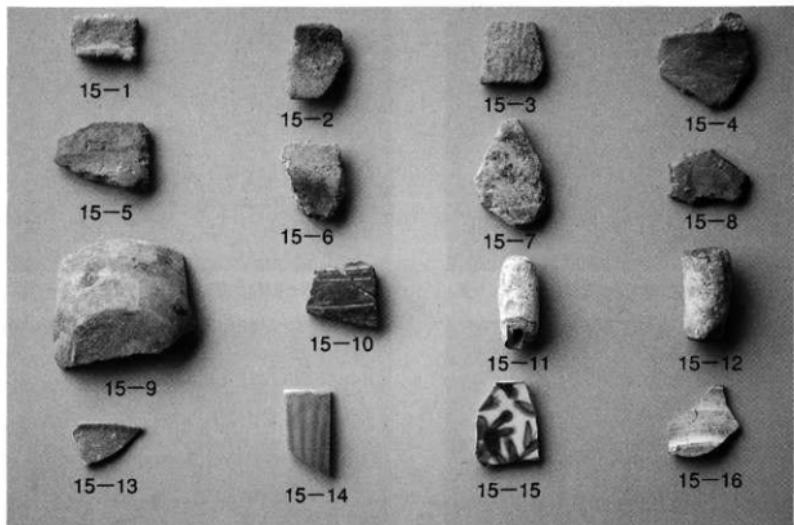
7. 北からみたB調査区北半の遺構完掘状況（6層上位部）



8. 南からみたB調査区南半の遺構完掘状況（6層上位部）



1. 東からみた調査区全景



2. 弥生土器・土師器・瓦器・陶磁器

平成15年3月6日 印刷
平成15年3月12日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第41集

寺ノ前遺跡・啜遺跡

発行 匹見町教育委員会
鳥取県美濃郡匹見町大字匹見41260

印刷 株式会社 谷口印刷
鳥取県松江市東長江町902-59
